十二

第十二章　東方ノ危機（千八百三十九年ヨリ千八百四十年ニ至ル）

其一　東方ノ危機列國會議ヲ開クノ議

土帝マムードハ其齢未タ老ヒタリト言フニアラザルモ（而モ其ノ氣力大ニ衰ヘテ死期ノ既ニ近キニ在ルヲ。）慮カリ其死スルニ先チテ埃及ノ「パシヤー」メヘメツタリニ對シテ其恨ヲ報セムト欲シ往キニハシリーノ人民ヲ煽動シテ「パシヤー」ニ叛カシメシガ尚ホ未ダ心ニ飽ラズシテ公然之ヲ攻撃セムコトヲ計リ大兵ヲ発シテ「ユーフラード」河岸ニ屯集セシメタリ而シテ「パシヤー」モ亦其征略セル境土ヲ挙テ必ズ之ヲ其

世襲ノ封領トナサムト欲シ土帝ノ之ヲ聴
カザルヲ憤ホリ其兵ノ来攻ヲ逆撃スルノ備
ヲ為セリ是ニ於テ欧洲諸強國ハ一タヒ東方ニ
於テ戦端ヲ啟クトキハ施キテ欧洲全土ノ紛
擾ヲ惹起セムコトヲ恐レ双方ヲ抑制シテ戦
ニ至ルコト勿ラシメムト欲シ百方周旋スル
所アリシニメヘメツタリーハ必ズシモ強ヒテ
戦ヲ欲スルニアラザルモ土帝ハ其ノ戦勝ノ
必然ナルヲ信シテ列國ノ勧告ヲ容ルヽコトヲ
肯ムセズ千八百三十九年四月二十一日ハフイズ
「パシヤー」ノ率ヒタル土軍ノ先衛ハ既ニウーフ
ラードヲ渉リ其後チ数週間ヲ出デズシテ
全軍悉ク シリー ニ進入シ六月七日土帝ハ一ノ

公文ヲ発シテメヘメツタリーノ叛逆ノ罪ヲ鳴
ラシ明カニ之ト戦ヲ開クベキヲ宣示シタリ
列國ハ共ノ報ニ接シテ大ニ驚キ露国ハ先ヅ土
耳格ヲ控制シテ戦ヲ止メシメムト欲シ而シテ
自餘ノ諸国ハ露国ヲシテ敢テ干渉ヲ土廷ニ加フ
ル無ラシメムコトヲ望メリ蓋シ露土ノ間ニハ常
ニアンキアル、スケレッシーノ條約ノ存スルアリテ
露帝ハ何時ニ係ハラス其意ノ欲スルカママニ土
耳格ノ運動ヲ拘束スルヲ得ベシ然レドモ露
帝ヲシテ其為ス所ヲ恣ママニセシムルハ固ヨリ
自餘ノ諸強国ノ欲スル所ニアラズ而シテ英
国ハ其最モ甚シキ者タリ故ニパルメルストンハ
専ラ露国ノ挙動ヲ注視シ其佛国ニ對スル

怨恨ヲ忘レ相倶ニ力ヲ戮セテ露国ノ企圖ヲ防遏セムト欲シ以為ヘラク二国其艦隊ヲ合シテ之ヲダルダネールノ海峡ニ送リ而シテ露国ノ軍艦若シ君士坦丁堡港ニ到ルトキハ二国ノ艦隊モ亦齊シク海峡ヲ通過シテ港内ニ達スベシ土廷若シ之ヲ支フトキハ兵力ヲ用イテ之ヲ排スルモ亦決シテ不可ナルコトナシト是レ実ニルイー、フイリツプノ為メニ再ビ英国ト結托スベキ最好ノ機會ニシテ佛国果シテパルメルストンノ提議ニ應スルトキハ一方ニハ其敵タル露帝ノ勢力ヲ防遏スルヲ得ベク他方ニハ其友タルメヘメツトアリーヲシテ能ク其ノ要求ヲ貫クコトヲ得セシメシナルヘシ然レドモ佛国政府ハ唯ダ其艦隊ヲダルダネールノ附近ニ派遣シタルノミニシテ敢テ英国政府ノ提議ニ應シテ急激ノ手段ヲ用ユルヲ欲セズ而シテ英国モ亦仏國ノ援ヲ得ズシテ独リ其企図ヲ断行スル能ハズ是ヨリ以降英国ノ仏国ニ對スル怨恨一層其深キヲ加ヘタリ蓋シ佛国政府ノ主トシテ希望スル所ハ一ニ戰争ヲ避クルニ在リ然ルニ今若シ英国ノ提議ニ應シテ急激ノ措置ニ出ツルトキハ是レ適ニ戰争ヲ促ス所以ニアラズトセズ況ムヤ佛国ハ元来英国政府ニ對シ毫モ其信ヲ措カザルヲヤ此ノ如クナルヲ以テ佛国政府ハ倫敦ヨリ来レル提議ニ應セズシテ維納ヨリ来レル提議ニ應スルヲ最モ其策ノ得タル者ナリ

外務省

ト思料セリ而シテ是レ実ニ至大ノ失錯ナリシナリ

千八百三十九年五月メテルニツヒハ五大強国ノ全権使臣ノ會議ヲ維納ニ開クノ議ヲ提出シ仍テ以テ土耳格ニ於ケル露国一個ノ保護権ニ代フルニ列國共同ノ保障ヲ以テセムコトヲ計レリ意フニ此ノ提議タル頗ル仏国ニ便ナル所ナキニアラズ然レドモ更ニ他ノ方面ヨリ見レバ此ノ列国會議タル唯ダニ露土ノ間ニ於ケル海峡問題ヲ論議スルニ止マラズシテ更ニ土帝ト埃及ノ「パシヤ」トノ争ヲ仲裁シ土耳格帝国ノ存立ヲ固クスルガ為メメヘメツタリーノ勢力ヲ削弱セムトスルコト疑ヲ容レズ然ルニボスフオール海峡ヨリ

露国ノ勢力ヲ排斥スルハ固ヨリ佛國政府ノ欲スル所ナリト雖トモ「パシヤ」ヲシテ能ク其主張ヲ貫キ大ニ其勢力ヲ擴大セシムルハ亦其切ニ希望スル所ニシテ當時佛朗西全国ヲ挙テ齊シク「パシヤ」ニ同情ヲ表シ此事ニ関スル代議院ノ討議ハ六月二十四日ヨリ七月一日ニ亘リジヨツフロアリー氏ノ報告並ニ諸名士ノ演説ハ佛国ハ宜シク列國會議ニ加入シ列國ヲ糾合シテ露国ノ野心ヲ抑制スルト同時ニ亦其ノ名誉ヲ賭シテメヘメツタリーヲ扶ケ以テ其要求ヲ貫徹セシメザルヘカラズト言フニ在リテ其語氣頗ル激越ニ渉リ佛國ト齊シク東方ノ均勢ヲ維持セムコトヲ欲スル諸国ヲシテ大ニ危懼ノ念ヲ

発セシメタリ蓋シ當時佛國ノ人心ハ最近数年間ノ政策ノ慎重ニ過キタルニ反動ノ勢ヲ激成シ政府ニ迫リテ大ニ其勢力ヲ外ニ振ヒ歐洲列国ヲ其制令ノ下ニ措キテ其千八百十五年ニ於ケル敗辱ノ怨ヲ報セムト欲スル者ノ如ク往キニ千八百三十年ニ於テルイーフイリツプガ宜シク為スヘクシテ為スコトヲ敢テセサリシモノ今乃チ之ヲ為スノ好機ニ際會セリト思料セリ然レドモ是レ甚ダ時勢ニ通セサルノ論ナリ今夫レ東方問題ヲ五大國ノ審議ニ附スルトキハ其中英露墺ノ三國ハメヘメツタリーニ對シテ常ニ敵意ヲ挟メルヲ以テ苟モ其不利ヲ醸スベキ事項換言スレハ佛国ノ不利ヲ醸スヘキ事項ニ就キテハ仮令之レガ為メ互ニ巨大ノ譲歩ヲ為スコトアルモ亦必ス其意見ヲ一ニセサルヘカラズ而シテ普國ハ常ニ仏国ノ為メニ其莱因洲ヲ奪ハレムコトヲ懼ルヽノ念ニ堪ヘザルヲ以テ苟モ仏国ノ勢力ヲ抑フルニ足ルヘキ者アラハ亦必ス三国ト其運動ヲ倡ニセサルヘカラズ夫レ然リ今若シ仏国ニ對シテハショーモン條約ノ再訂ヲ視ルガ如キコトアラバルイーフイリツプハ果シテ意ヲ決シテ之ニ抗スルコトヲ得ヘシトスル乎

メテルニツヒノ提議ハ仏国ニ於ケルガ如ク亦露国ノ喜フ所トナラズ蓋シ露帝ハ固ヨリ自國ノ東方ニ於ケル勢力ヲ拘束スルヲ肯トスル列國會議ノ權力ヲ認ムルコトヲ欲セズ帝ハ固ヨリ此

ノ會議ニ加入スルトキハ由リテ以テ大ニ佛國ノ勢力ヲ揃フルヲ得ベキコトヲ悟ラザルニアラサルモ公然列國共同ノ要求ニ屈従スルコトナクシテコノ利益ヲ收ムルノ手段ナキニアラズト思料シ英國政府ガ佛國ニ對シテ痛ク怨ヲ抱ケルヲ視テ之ニ多少ノ讓與ヲナシテ其協力ヲ仰キ圖リテ以テ一面ニハ自國ニ對スル列國ノ合盟ヲ妨ケ他ノ一面ニハ佛國ヲ孤立ノ境ニ陷レテ復タ其志ヲ東方ニ逞ウスル能ハサラシメムコトヲ計レリ是レ露帝ガ俄カニ列國會議ヲ開クノ議ニ同意ヲ表スルコトヲ肯ムセザル所以ニシテ帝ハ是ヨリ後チ專ニ好意ヲ英國ニ表シ以テ其歡心ヲ得ムコトヲ力メリ

其二 アブヂユル、メヂツド及ヒ千八百三十九年七月二十九日ノ公文

是時ニ方リテ一大急報ハ疾雷ノ如ク東方ヨリ来レリ六月二十四日メヘメツタリーノ子イブラヒン「パシヤー」ハシリー國ネシーブニ於テ土耳格ノ兵ヲ撃チテ大ニ之ヲ破リ越テ六日土帝マムードハ未ダ其兵ノ敗報ヲ聞クニ及ハズシテ病ニテ殂シ其アブヂユル、メヂツド齡僅カニ十六ニシテ代リテ帝位ニ即ケリ次ヒテ七月四日ニ至リカピタン「パシヤー」アクメーハ土耳格總理大臣コースレフト怨ヲ構ヘ悉ク其統率スル艦隊ヲ率ヒ奔リテメヘメツタリーノ陣ニ投セリ而シテアクメーガ此ノ事ヲ決行スルニハ佛國政府亦窃カ

ニ映カリテカナキニアラズ是ヨリ先キ佛國内
閣首相大將スールハ一人ノ密使ヲアレキサンドリ
ニ派遣セシガ六月二十七日右ノ密使ハメヘメツタリ
トノ旨ヲ兼ケテイブラヒンノ陣營ニ到リ其ノ
進軍ヲ止メムコトヲ命シタルニイブラヒンハ即
時ニ其命ニ從ヘリト雖ドモ他方ニ於テハダルダ
ネール海峡ヲ警備シタル佛國艦隊ハ啻ダ
ニアクメーガ土耳格艦隊ヲ率ヒテ逃走スルヲ支
ヘサルノミナラズ却テ陰ニ之ト通謀シテ英露
ノ艦隊ヲ欺瞞シアリメーヲシテ一モ危険ヲ
冒カスコトナクシテ悉ク其軍艦ヲメヘメツ
タリーニ交附スルヲ得セシメタリ故ニ土廷ハ
今ヤ海陸ノ兵ヲ併セテ悉ク之ヲ失ヒ而シ
テ欧洲ノ一大強國ハ亦其敵ヲ援ケテ以テ大ニ
其志ヲ逞クセシメムトス土廷奈何ゾ震駭セ
ザルヲ得ムヤ乃チ急ニメヘメツタリニ向フテ埃
及ヲ以テ其世襲ノ封領トナスノ命ヲ傳ヘリ
然レドモメヘメツタリハ未タ之ヲ以テ足レリト
ナサズ而シテ土帝ノ諸大臣ハ他ニ其策ノ出ツル
所ヲ知ラス遂ニ全然「パシヤー」ノ要求ヲ容レテ
和議ヲ講セント欲スルニ際シメテルニツヒハ忽
チ一ノ方策ヲ案出シ土廷ヲシテ其媾和ノ時
期ヲ延ハスコトヲ得セシメタリ七月二十七日土都
ニ駐劄セル五大國ノ大使ハメテルニツヒノ発案
ニ本キテ急ニ一通ノ公文ヲ土廷ニ提供セシガ其
公文ノ言フ所ハ下ノ如クナリキ云ク『五大國ハ

外務省

東方問題ニ就キテ共同ノ運動ヲ為スニ決シタリ故ニ土耳格政府ハ其協賛ニ由ルニアラスムハ敢テ和議ヲ決スルコトナク以テ其合同運動ノ結果ヲ待タザルヘカラズ本書ニ記名シタル外臣等ハ各ニ其本国政府ヨリ受ケタル訓令ニ本キ謹デ此事ヲ土耳格朝廷ニ告クルノ栄誉ヲ荷フト云

土耳格ハ此ノ公文ニ由リテ新タニ事局ノ変ヲ生スルニ至ルマテ欧洲列国ノ共同保護ノ下ニ置カレタレバ土帝トメヘメツワタリートノ間ニハ復タ直接ノ協定ヲ遂クルコト能ハズ憶フニ墺国カ率先シテ此策ヲ案出シタルハ良トヨリ其故ナキニアラズ英国ガ即時ニ墺国ノ提議ニ同意シタルモ其意亦解スヘカラザルニアラズ。東方問題ニ就キテハ甚シク利害ノ関係ヲ有セザル普国ガ欧洲列国ノ共同ノ運動ニ洩ル、ナカランド欲シテ之ニ同意シタルモ亦決シテ怪シムヘキニアラズ露国カ敢テ之ニ反対ヲ唱フルコトアラザリシモ亦必ラズシモ驚クヲ須ヒズ何トナレハ露国ハ其内心ニ於テ仮令ヒ何カナル禍心ヲ包蔵セリトスルモ当時其視所時モ緩フスベカラザル急務ナリト做セルハ一ニメヘメツワタリーノ勢力ヲ抑挫キテ更ニ仏国ノ勢力ヲ抑フルニ在リシカ故ナリ独リ仏国ハ何故ニ其敵人ニ合シテ其友人ニ制令ヲ加フルコトヲ敢テシタルカ意フニ是レ唯ダ当時

佛国政府ノ東方ニ對スル外交政策ガ一ニ姑息
彌縫ヲ旨トシタルノ致ス所ニシテ其国ノ不利
良トニ之レヨリ大ナルハナシ蓋シルイーフイリツプ
及其大臣等ハ主トシテ仏国ガ列国共同ノ運動ニ滲
ル、勿ラムコトヲ欲シ其諸強国ニ對スル約束ハ必
ラスシモ深ク意トスルニ足ラズトナシ且ツメヘメツタリー
ハ連リニ戦ニ克チテ其兵力強盛ヲ極メタレハ列
国會議ノ決議ヲ以テ其征略セル土地ヲ奪還シ
其要求セル王襲権ヲ拒ムコト能ハスト思料シ
タリ要スルニ仏国政府ハ今ニ於テ明カニ欧洲列国
ト絶ツヲ得策ニアラストナシ列国ガ早晩必ス
其ノ既ニ成立シタル事実ヲ兼認シ以テ其保護
者タルメヘメツタリーニ充分ノ満足ヲ與フヘキヲ

慮リ容易ク土廷ニ提供セル公文ニ調印シタルナリ
然レドモ是レ実ニ大ナル謬見ニシテ仏国カ之ニ由
リテ何カニ其不利ヲ被ムリタルカハ後段ニ記スル所
ニ徴シテ知ルベキナリ

其三 露国漸ク英国ニ親ム

列国大使ヨリ土廷ニ公文ヲ提供シタル後チ英国ハ
復タ君士坦丁堡ニ於テ露国独リ干渉ヲ事ト
スルヲ恐ルヽノ要ナキヲ以テアレキサンド
リーニ於ケルメヘメツタリーノ勢力ヲ挫クノ計ヲ
施コセリ他ナシメヘメツタリーノ勢力ヲ挫クハ是
レ則チ仏国ノ勢力ヲ挫ク所以ニ外ナラサレハナリ
但ダ夫レパルメルストンハ全然メヘメツタリーノ勢
力ヲ減却セムコトヲ欲セサルニアラザルモ此ノ

如キハ俄カニ其能クスル所ニアラサルヲ以テ先ツ其領土ヲ埃及一国ニ限ラムト欲シ「パシヤ」若シ之ヲ諾スルトキハ土廷ヲシテ即時ニ之ニ世襲権ヲ与ヘシムヘシト揚言シ千八百三十九年八月此事ニ関スル最後ノ催告状ヲ「パシヤ」ニ送リ彼レ若シ聴カサルトキハ厳励ナル強制手段ヲ施スノ説ヲ立テ以テ諸大国ノ協賛ヲ乞ヘリ然ルニ北欧ノ三国ハ直チニ之ニ同意ヲ表シタルモ独リ仏国政府ノミハ英国ノ提議ニ反対シメヘメツタリーノ為メニ埃及ノ外尚ホ其現ニ領有セル土地ヲ世襲ノ封領トナサヾルベカラズト主張シ此ノ事ノ為メニ英仏両國ノ間ニ一大紛議ヲ生シ加フルニ両国ノ新聞紙ハ交々矯激ノ言ヲ弄シテ盛ニ辯難攻撃ヲ事トシ両國ノ交渉ヲシテ一層其困難ヲ加ヘシメタリ

露帝ハ英仏二國ノ相反目スルヲ視テ心窃カニ之ヲ喜ビ深ク英国ノ歓心ヲ結ビテ益々其仏國トノ交情ヲ離間シ依テ列國全体ノ協定ヲ待タズ独リ英露二國ノ商議ニ由リテ東方問題ヲ決定スルノ時機今方ニ至レリト思料シ九月十五日露国ノ一外交官ブルノウ男ハ両國協商ノ談判ヲ開クノ任ヲ帯ビテ倫敦ニ来リ即時ニパルメルストンニ會見シテ談判ヲ開始シ而シテブルノウ男ハ露帝ガメヘメツタリーニ對スル處分ニ就キテ全ク英国ト其ノ意見ヲ一ニシタルヲ宣言シ且ツ露土ノ間ニ於ケル

アンキヤル、スケレツシーノ條約ハ二年ヲ経テ其ノ満期ニ至ルベキモノニシテ満期ノ後チハ露國ハ敢テ同條約ヲ再訂セサルヘキヲ約シタリ但ダ夫レ土廷ガ他國ノ援助ヲ要スルノ場合ニハ独リ露國ノミ黒海及ビ海峡ニ由リテ其援兵ヲ送クルコトヲ得ヘク而シテ自餘ノ諸國ハ唯ダ其艦隊ヲダルダネールノ海峡以外ニ屯ロシテ遥カニ露國ニ應援スルニ限ラムコトヲ請求セリ勿論露帝カ土帝ノ為メニ兵力干渉ヲ加フルニ際シテハ自已ノ名ヲ以テスルニアラスシテ列國共同ノ名ヲ以テスヘキモノトス

パルメルストンハ一意唯ダ仏國ニ屈辱ヲ與ヘムト欲シフルノウヨリ提出セル條件ハ擧ゲテ之ヲ容納セリ然レトモ當時ノ英國内閣ニハパルメルストンノ外ニ務メテ温和ノ政策ヲ事トスルボーランド、ラツセル、クラレンドン等ノ諸氏アリテ一方ニハ英仏間ノ交情ノ疎隔シタルヲ憂ヒ他方ニハ露帝ノ提議ノ如クシテ英露ノ同盟ヲ結ブハ其價貴キニ過キタリトナシ敢テパルメルストンノ説ニ従ハズ故ヲ以テ露使ハ遂ニ其同盟条約ヲ決定スルニ至ラスシテ同年十月更ニ露帝ノ訓令ヲ乞フガ為メニ倫敦ヲ去レリ是時ニ方リ英國内閣ハパルメルストンヲ除クノ外再ヒ仏國ト妥協ヲ遂ケムト欲スルノ意アリ仏國ニ向ヒ埃及ノ外更ニアークル州ヲ以テメヘメツトアリーノ世襲領トナスノ

議ヲ提出セリ仏国若シ之ヲ容納セバ一モ其体
面ヲ傷フコトナクシテ再ヒ英國ニ親シムコトヲ得
タリシナリ故ニ澳普ノ二國ハ荐リニルイ、
フイーリップニ向フテ英国ノ提議ニ應セムコ
トヲ勧告セリト雖ドモ當時仏国ノ心ハ痛ク
英国ノ措置ニ憤激セルヲ以テ政府モ亦衆
怒ヲ犯カシテ俄カニ英国ト和スルコト能ハズ
蓋シ仏國ノ人民ハ英國ガ西班牙ニ於テエスパ
ルテローヲ扶ケテ其権力ヲ恣マヽニスルヲ視
テ自国ニ辱ヲ與フル者トシ又アルゼリーニ於
テアブデル、カデーガ再ビ兵ヲ挙ケテ仏軍ニ
抗スルヲ視テ是レ亦英國ノ使嗾ヲ受ケテ
然ル者ナリトナシ英国ヲ憎ムコト仇讐モ

啻ナラザルノ趣アリ而シテスール内閣ハ當時
頗ル人望ヲ失ヘルヲ以テ更ニ國民ノ意思ニ
戻レル政策ヲ事トシテ其ノ不人望ヲ重スルヲ
欲セス且ツ彼レハ英国ハ到底東方問題ニ就
キテ露国ト協商ヲ遂クルコト能ハスト思料
シ又メヘメツトアリーノ兵威ノ盛ムナル英露ト
雖トモ容易ク之ヲ刧制スルコト能ハスト思料
シ加フルニルイ、フイリップハ厚ク澳普二國ノ
情義ヲ信シ果シテ危急ノ場合ニ際會セバ
必ス二國ノ援ヲ得ヘキヲ期セリ此等ノ理由ノ
為メニ佛國政府ハ埃及問題ニ就キテ毫モ
其主張ヲ枉クルコトヲ肯ムゼザリキ此ノ時
前内閣ノ首相チエールハ其再ビ政権ヲ獲ル

ノ時機應ニ近キニ在ルベキヲ察シ千八百四十
年一月代議院ニ於テ剴切ナル一場ノ演説ヲ
為シヽガ其演説ノ要旨ハ英國トノ同盟ハ良
トヨリ不可ナルコトナキモ之カ為メニメヘメツタ
リヲ措テ顧ミルコトナキハ是レ大ニ仏国ノ体面
ヲ辱メ其利益ヲ失フ所以ナリト言フニ在リキ彼レハ
仏国政府カ七月二十七日ノ公文ニ拘泥シテ拱手為ス
所ナキハ失錯ノ太甚シキ者ナリト称シ必スシモ
明カニ該公文ヲ非認スルコトナキモ尚ホ能ク自由
ノ運動ヲ為スニ難カラスト揚言セリ既ニシテ露
使ブルノウハ再ビ倫敦ニ到リ露帝ノ命ニ依リ海峡
問題ニ就キテ大ニ譲歩ヲ為スヘキヲ諾シタルノ殺
アリ然レドモ仏國政府ハ猶ホ之ヲ顧ミルコトナク

苟モ全然其主張ヲ貫クニアラスムバ則チ一モ為
ス所ナキニ若カストナシ一月廿六日スールトハパルナルス
トンニ一ノ公文ヲ送リテ告クルニ此意ヲ以テシ次ヒ
テ倫敦駐劄ノ仏国大使セバスチアニーハ優柔ニ過
キタリトナシテ其職ヲ罷メ當時埃及ト問題ニ就
キテ政府ノ説ニ左袒セルギゾーヲ挙ケテ之ニ代
ラシメ撓クルニ固ク「メヘメツタリ」ノ要求ヲ主張シテ
一歩モ譲ルヘカラズト言フノ訓令ヲ以テシタリ
既ニシテ三月一日遂ニ内閣ノ更迭アリテチエールハ
再ビ首相ノ職ニ就キ佛國ノ光榮ヲ宏揚スル重
任ヲ負フテ欧洲列國ニ臨ミタリ

其四　チエール及ビパルナルストン、七月十五日ノ條約

チヱールハ今尚ホ千八百三十六年ニ於ケル失敗ヲ心肝ニ銘記シテ忘ル、コトナク其自國ヲ愛スルノ厚キ仏國政府カ多年其外交上ノ勢力ヲ失墜セルヲ見テ日夜憤慨ノ念ニ勝フルコト能ハス彼レハ敢テ千八百十五年ノ條約ヲ蔑視シ之ニ向ヒテ十字軍ヲ起コサムト欲スル者ニアラズト雖ドモ該条約中尚モ仏国ノ屈辱ヲ招クヘキモノハ之ヲ厭フコト最モ太甚シク矢フテ再ビ三色旗ノ威厳ヲ挽回セント欲シ好ミテ革命的言動ヲ事トシテ忌憚スルコトナク挙國人民ト斉シク大ニ帝政時代ニ於ケル戦勝ノ光榮ニ心酔セリ憶フニ彼レカ愛国ノ至誠ハ良トニ多トスルニ足ルヘシト雖ドモ之ヲ當時ノ形勢ニ視ルニ彼レカ如ク公然其所思ヲ表白シテ隠蔽スル所ナキハ適マ列国ノ猜忌ヲ招キテ自国ヲ禍ヒスル所以ニ外ナラス寧ロ其ノ愛国ノ至情ヲ抑ヘテ務メテ民心ヲ鎮静スルハ蓋シ最モ其策ノ得タル者タルニ似タリ然レトモ彼レノ為ス所ハ此ニ出テズシテ只管ラ国民ノ希望ニ満足ヲ與ヘムト欲シ就職ノ始メヨリアルゼリーノ征討ニ大ニ其力ヲ致シ西班牙ニ於テハエスパルテロートマリー、クリスチヤンストノ間ニ漸ク不和ヲ生スルヲ視テマリー、クリスチヤンスノ党ヲ援ケテ再ヒ仏国ノ勢力ヲ回復セムコトヲ計リ仏国人民ヲ挙テ斉シク其政策ノ當ヲ得タルヲ称賛セリ既ニシテ内閣ハ議院ニ於ケル或ル種ノ困難ヲ避クルカ為メ英国政府カ仏国ノ

要求ニ應シテ将ニ拿破烈一世ノ遺骸ヲ還サムト
スル旨ヲ公示シタルニ国民ノ歡喜ハ殆ムド其頂
上ニ達シタリ蓋シ拿破烈翁大帝ノ偉績ハ詩人ノ
頌辞ヲ得テ深ク人心ニ銘刻シルイ、フイリップノ
如キ着実ノ思想ヲ有スル者スラモ尚ホ且ツ其
惑ハズ所トナリ其國人ノ拿破烈翁ヲ追慕スル
ハ則チ其王政ニ危害ヲ及ボス所以ナルヲ察セ
ズシテ却テ其政策ニ利スル所アルベシト思料セ
リ而シテ其思料スル所ノ何カニ謬レル者ナルカハ
将来事実ノ之ヲ証明スル時アルヘク要スルニ王
ハ常ニ平和ヲ好ミ戰乱ヲ厭ヒ外国トノ衝突ヲ
避クルコトヲ之レ勗ムルニ係ラス今拿破烈翁ノ
遺骸ノ帰来ノカ為メ大ニ国民ニ敵愾心ヲ作

興シ由リテ以テ外国ノ猜忌ヲ招クニ至ルヘキヲ
解スルコト能ハサリキ果セル哉後日遺骸ノ巴里
ニ達シテセーヌ河畔ニ改葬スルニ當リ仏国ノ民
ノ之ヲ歡迎スルコト恰モ狂スルカ如ク曾テ千八百
十五年ノ条約ノ存在スルヲ顧ミズシテ只管ラ拿
ヲ拿破烈翁ノ盛時ヲ追懐シ其戰勝征略ノ功ヲ
嘖々トシ今代ノ政府モ亦宜シク其遺業ヲ継キテ
仏国自然ノ国境ヲ恢復セザルベカラズト絶叫
シ従ヒテ欧洲列国ハ皆斉シク仏国ニ対シテ猜忌
ノ念ヲ生スルニ至レリ而シテ是レ実ニパルメルス
トンガ仏国政府ノ乞ニ應シテ拿破烈翁ノ遺骸
ヲ還與スルニ際シテ豫メ期待シタル所ナリト
ス

チエールハ其内閣首相ニ任スルニ先チテ英仏ノ仝
盟ヲ主張セシカ是ニ至リテ尚ホ其ノ前説ヲ飜スコ
トナク專ラ英国政府ト相提携スルノ希望ヲ示
シ甘言ヲ以テパルメルストンヲ欺キ又當時英国ガ
葡萄牙又ハ合衆国等ニ對シテ釀シタル紛議ニ
関シ聊カ英国ノ為メニ盡ス所アリ以テ其歡心ヲ
繋カムト欲シタルモパルナルストンノ狡智ナル其
小恵ニ酬エルニ亦小恵ヲ以テシタルニ過キズ要ス
ルニ此ノ両政治家ハ嘗テ相信スルコトナリシテ
常ニ相欺カムト欲シ而シテ埃及問題ハ早晩必
ス両者ノ間ニ分離ヲ来サヾルベカラズ此ノ事ニ就
キテモ両者交々権謀ヲ事トシチエールハ往キ
ニ痛ク七月廿七日ノ公文ヲ排斥セシニ係ラズ佛

國ハ東方問題ニ關シテ他ノ四大強國ト相離ル
ヽヲ欲セスト称シテ敢テ該公文ヲ廃棄スル
コトアラザリキ然ルニ露使ブルノウガ毎ヒ倫
敦ニ来リタルノチ英国政府ハ既ニ主要ノ点ニ
就キテ露国ト倶ニ略ホ其協商ヲ遂クルコトヲ得
タレバ更ニ仏墺普ノ三国ニ向ヒ相倶ニ東方問
題ヲ決定セムコトヲ促カシ之レガ為メ五大国ノ
使臣會議ヲ倫敦ニ開キタリ蓋シ英国ハ特ニ
露帝ト倶ニ相約スルコトヲ為サズシテ汎ク
列国ノ協定ニ付セムコトヲ欲シタルナリ此時
仏国大使ギゾーハ其ノ本国長官ノ訓令ニ依リ
會議ニ列シテ大ニ努力スル所アリ而モ其ナス
所ハ會議ノ議事ヲ進捗セシムルニ在ラスシテ

務メテ之ヲ延滞セシムルニ在リ蓋シチエールハ偏
敦會議ノ結果ノ必スメヘナツタリーニ益スル所ナ
カルヘキヲ知レリ故ニ務メテ其會議ヲ延長シ
其ノ間ヲ以テ土帝トメヘナツタリーノ間ニ直接ノ
協定ヲ遂ケシメ列国ヲ強促シテ既ニ成立シタル
事實ヲ承認スルノ已ムコトヲ得サルニ至ラシメ
ムコトヲ計リタルナリ是ヲ以テパルメルストン
ハ鋭意シテ其議決ヲ終ラムト欲スルモ仏国
大使ハ種々ノ辞柄ヲ搆ヘテ始メハ土廷ノ全權
委員ノ来會ナキヲ口実トシテ之レナクムハ何
事モ決定スルコト能ハスト称シ之ヲ久クシテ土
廷ノ全權大使既ニ到ルヤ墺普ノ二国モ亦速カ
ニ事ヲ決セムト欲シ仏国ト英露二国トノ間ヲ

外務省

調停シ埃及ヲ以テメヘナツタリーノ世襲ノ領トナシ
シリーヲ以テ其終身ノ封領トナサムコトヲ提議
シタルモギゾーハ本国政府ノ訓令ヲ俟シテノ
明白ニ之ニ答フルコトナク荏苒二個月ヲ経過スル
モ決議ハ遂ニ一歩モ進ムコトアラサリキ次ヒ
テパルメルストンモ亦仏国ニ向フテ埃及ヲ以テ「パシ
ヤリ」ノ世襲領トナスノ外更ニアークルヲ以テ
其終身ノ封領トナスノ新案ヲ提出シ是レ其
ノ最後ノ決心ニシテ仏国政府カ之ニ對シテ即
時ニ可否ノ回答ヲ為サムコトヲ要求セリ然レト
モチエールハ猶ホギゾーニ命シテ之ニ答フルコ
トナカラシメ以テ遂ニ六月下旬ニ至レリ而シテ
仏国政府ノ依違決セサルコト此ノ如クナル所以ハ

外務省

蓋シ其前キニ東方ニ派遣シタル密使カ土帝ト
メヘメツタリートノ間ニ媾和条約ヲ訂結スルノ報ヲ
待テル者ニシテ仏国ノ秘密運動ノ為メニメ
ヘメツタリーノ讐敵タル土廷ノ大相宰コースレウハ
五月ヲ以テ其職ヲ罷メラレ次ヒテメヘメツタリー
ハ土廷ト倶ニ直接ノ決定ヲ遂ケ当初ノ要求ニ
就キテ幾分カ譲歩ヲ為スノ意アルコトヲ声
言シ一人ノ使節ヲ君士担丁堡ニ派出シ在ノ使
節ハ同都駐劄ノ仏国大使ボントアリーノ指揮
ヲ受ケテ土廷ノ外務大臣ト倶ニ談判ヲ開始シ
日ナラスシテ将ニメヘメツタリーニ利益アル条約ヲ訂
結セムトスルノ勢アリチエールハ巴里ニ在リテ
遥カニ此ノ陰謀ヲ指導シ且ツギゾーニ訓

令ヲ下タシ深ク其ノ事ヲ隠蔽シテ人ニ示スコ
ト無カラシメ其秘策ノ全然成功ニ至ルノ後
チ突然之ヲ発表シテ倫敦会議ヲ驚カサム
コトヲ計レリ
不幸ニシテ其秘策ハ夙ニ土都駐劄ノ英国
大使ポンソンビー及ビ仏都駐劄ノ墺国大使ア
ポニイノ諜知スル所トナリテパルメルストンノ
耳ニ達シ而シテパルメルストンハ容易クチエール
ノ欺騙スル所トナルヲ欲セズシテ更ニ之ニ報ユ
ルノ計ヲ施シ一方ニハ土都駐劄ノ英国大使ヲ
シテ百方手段ヲ竭クシテ土帝トメヘメツタリー
トノ間ニ於ケル媾和条約ノ訂結ヲ延ハサシメ
他方ニハ巨額ノ金ヲ散シテシリーノ人民ヲ煽

外務省

動シメヘメツタリーニ叛キテ乱ヲ起サシメ更ニ
倫敦會議ニ於テ其全力ヲ挙ケテ佛國ヲ排
斥セリ是ヨリ先キパルメルストンハ唯ダ其形式
上仏國政府トノ談判ヲ継續セリト雖ドモ其
實ハ始メヨリ夙トニ仏國ニ由ラズシテ埃及問題ヲ
決定セムト欲スルノ意アリ此事ニ就キ第一ニ必要
ナルハ露国ト協商ヲ遂クルニアリ是レ其既ニ実
行セル所其次ハ墺普ノ二國ヲ誘引スルニ在リ而
シテ是レモ亦難キニアラス蓋シ墺普ハ仏国ガ
其好意ヨリ出テタル調停ノ議ヲ拒斥シタルヲ
視テ心甚ダ平カナル能ハズパルメルストン乃チ二国
ニ説クニ仏国ガ英露ヲ凌キ墺普ヲ欺キテ
遂ニハ其制令ヲ欧洲ニ加ヘムトスル所以ヲ以

テシ又之ニ示スニ仏国人民ガ大ニ其愛國心ヲ奮
興シ将ニ千八百十五年ノ条約ヲ破壊シテ日耳曼
ヲ侵略シ旋キテ全欧ノ大乱ヲ惹起セムトスル所
以ヲ以テセリ是ヨリ先キ普国ニ於テハ年老テ平
和ヲ愛好セルフレデリツク、ギーオーム三世崩シテ
長子フレデリツク、ギーオーム四世新タニ王位ニ即キシガ
生来極メテ仏国人ヲ憎悪セルヲ以テ之ニ説クニ四
大国ノ協商ヲ遂ケ仏国ニ対シテ千八百十四年ノ大
仝盟ヲ再訂スヘキヲ以テスルハ是レ甚ダ容易ナリ
シナリ若シ夫レ墺国ニ至リテハ其戦争ヲ怕ルヽ
コト最モ甚シキヲ以テ敢テ英国ノ提議ニ應ス
ルヲ好マズト雖ドモ自国獨リ欧洲ノ協商ニ漏
ルヽハ亦其欲スル所ニアラス他ナシ彼レ若シコノ

怳商ニ加ハルトキハ一方ニハ力メテ仏国ノ勢力ヲ抑
フルト同時ニ他方ニハ其同盟国ヲ牽制シテ敢テ
極端ノ手段ヲ用ヒシメザルベキヲ信シタレハナリ
パルメルストンハ此ノ四國仝盟ヲ結フニ極メテ秘密ノ
運動ヲ旨トシタルモ仏国大使ギゾーハ夙ニ其運
動ヲ偵知シテ千八百四十年六七月ノ交屡ニ警報
ヲチエールニ傳ヘタリキ然レドモギゾーハ敢テ
英国ト小欧ノ三国トガ其協定ノ事項ヲ豫シメ
仏國ニ示シテ其ノ加盟ヲ求ムルコトナクシテ其ノ
条約ニ調印ヲ欲ルベシト信シタルニアラズ又四國
間ノ協定カ俄カニ其成ルヲ告グベキヲ信シタル
ニアラズチエールニ至リテハ唯ダ日々ニ首ヲ長
クシテ土廷トメヘメツタリートノ間ニ於ケル媾

和条約確定ノ報ノ至ランコトヲ待チタリシノ
ミ此ノ間パルメルストンハ時機ノ既ニ切迫セルヲ
察シ若シ常ニ遷延決セスシテ土廷トメヘメツタリー
トノ間ニ媾和条約一トタヒ成ルトキハ其計画ハ
挙テ水泡ニ属スヘキヲ慮カリ七月四日其小欧
三國ノ使臣ト倶ニ協定シタル条約ノ草案ヲ
内閣ニ提出シテ仝意ヲ求メタルニ閣僚多ク
ハ其仏國ヲ凌辱スルノ太甚シキヲ難シ之レ
ガ為メニ一大紛争ヲ醸スニ至ルヘキヲ論シタル
モパルメルストンハ自ラ一切ノ責任ヲ負フテ其ノ
決シテ此ノ如キ憂ナキコトヲ辨シ何カナル
場合ニ於テモルイ・フイリツプハ戦ヲ開クノ有ニ
アラスト称シメヘメツタリーハ必ズ四国ノ提

外務省

議ニ従フテ抵抗ヲ試ミルコトアラズト主張シ若シ其意見行ハレサルトキハ即時ニ職ヲ辞スヘシト称シ論難数日ニ渉レル後チ「パルメルストン」ノ説遂ニ勝ヲ制シテ七月十五日條約ノ調印ヲ終ハレリ

此條約ハ数種ニ分レタル者ニシテ其第一ニ規定シタル所ハ訂盟諸國ハ土帝ノ請ニ應シテ之ト倶ニ土耳格帝國ノ獨立及ヒ其ノ領土ノ完全ヲ維持スルニ必要ナル手段ヲ施コスヘキヲ提議シ若シ埃及ノ「パシヤ」ニシテ此ノ事ニ関スル四国ノ提議ヲ容レザルトキハ兵力ヲ用ヒテ強制ヲ加フヘク而シテ君士坦丁堡及ヒ「ダルダネール」海峡ハ訂盟国共同シテ之ヲ護衛スヘシト言フニ在リ之ニ次ヒテ土帝ヨリ「メヘメツトアリ」ニ送ルヘキ最後ノ促答状アリ「パシヤ」ハ「カンジー」聖市「アダナ」及ヒ「シリー」ノ北部ヲ土廷ニ還付シ埃及ヲ以テ其世襲ノ封領トナシ「アークル」州ヲ以テ其終身ノ封領ト為サヾルベカラス而シテ彼レ若シ十日ノ期間内ニ此ノ条件ヲ採納セザルトキハ埃及ノ外一モ與フル所ナカルヘク更ニ十日間其回答ヲ延引スルトキハ復タ之ニ一切ノ保障ヲ與ヘザルモノトス此ノ他ニ尚ホ一ノ議定書アリテ訂盟国ハ外交ノ慣例ニ反シテ訂盟国ハ條約ノ批准ヲ待タス之レガ実行ニ着手スヘシト定メタリ

其五　戦争カ平和カ

七月十五日ノ条約ハ佛國ヲ欧洲ノ合同ヨリ排除シ
之ヲシテ手ヲ拱シテ其友邦ノ亡滅ヲ坐視セシメ
ムト欲スル者ニシテ仏國大使ギゾーハ其調印後既ニ
二日ヲ経テパルメルストンヨリ其通告ヲ得タルガ為
メ始メテ之ヲ知ルコトヲ得タリ而モパルメルストンハ
尚ホ其条約ヲ全文ヲ示スコトナク又其ノ実行ニ
関スル議定書ヲ隠蔽シ而シテ提督ストプフォルド
ニ急使ヲ馳セテ速カニ其ノ実行ニ着手スベキ
ヲ令シタリ
チエールハ倫敦ニ於テ四國条約ノ成レル報ヲ得テ憤
懣禁ヘルコト能ハザリキ彼レハパルメルストンヲ
翻弄セムト欲シテ却テ其翻弄スル所トナリシ
ヲ以テ痛ク其ノ自尊心ヲ傷ケラレ又其愛

國心ノ切実ナル其國ノ欺騙セラレ侮辱セラレ
脅迫セラルヽヲ思フテ大ニ之ヲ憂悶シ誓フテ
仏国ノ為メニ其辱ヲ雪カムト欲シ日夜其計
ヲ講スルコトヲ怠ラザリキ然レドモ彼レハ未
タ四国合盟カ直チニ兵力ヲ用ヰテ「パシヤ」ヲ強
制セムト欲スルヲ知ラス又「パシヤ」カ兵力ノ強
大ナル能ク四国合盟ニ敵スルニ足ルヘシトナシツ
ノ談判ヲ開キ戦備ヲ整フルニ尚ホ数月ノ
猶豫アルヘシト思料シタリ彼レノ方策ハ務メ
テ時期ヲ遷延シテ千八百四十一年ノ春期ニ達シ
而シテ其間佛国ヲシテ能ク新合盟ニ抵抗スル
ニ足ルノ兵備ヲ整ヘシムルニ在リ以為ラク此ノ
間ニ於テ四国同盟ハ「パシヤ」ノ強力ナル抵抗

ニ遣ヒ久其内訌ニ紛議ヲ生シ懐普ノ國ハ土
接ニ仏軍ノ勢力ス所トナリテ同盟ヲ退キ遂ニ
全ク同盟ノ瓦解ヲ視ルニ至ルヤ殆ムド疑ヲ容
レズ或ハ然ラザルモメヘメツアリノ兵果シテ勝
利ヲ獲テ普露二亞ヲシテ違背シ二亞ヲシテ
其兵ノ主力ヲ東方ニ用ヰヒシムルトキハ仏亞ハ
其虚ニ乗シテ軍ヲ擧ケ莱因ヲ侵カシ刖
ルプヲ擣キテ懐普二亞ヲ脅カスコトヲ得ヘ
シト

前記ノ如クナルヲ以テチエールハ本ヨリ戦ヲ好メ
ルニアラズ且ツ其必ズ避クヘカラザルヲ信シ
タルニアラズト雖ドモ亦其已ムヲ得ザルノ場
合ニ臨ミテハ敢テ之ヲ退避セサルノ決心ヲ

持セリ将タルイ・フイリツプニ至リテハ人若シ
七月十五日ノ条約訂結後其言ヘル所ニ由テ
之ヲ判スルトキハチエールヨリモ一層主戦説ニ傾
ケル者ノ如クナリキ彼レハ条約訂結ノ報ニ接シ
テ憤然トシテ云ク余ハ十年以来人ノ望ヲ
失フヲ顧ミズ時トシテハ生命ヲ失フノ危
險ヲ冒カシテ革命ヲ防禦スルニ力ヲ致シタ
リキ彼等カ欧洲ノ平和ヲ維持シ且王位ノ安
全ヲ保ツハ是レ皆余ノ力ニ由レル者ナリ而シテ
今乃チ彼等ノ余ニ報ユル所此ノ如シ彼等豈ニ
余ガ遂ニ赤帽ヲ戴キテ革命党タルヲ欲スル區
ト彼レハ共事其歓心ヲ収ムルニ百方力ヲ尽クシタ
ル懐普二亞ニ對シテ就中大ニ憤懣ヲ抱キ巴

里駐剳ノ英国大使ニ告ゲテ云ク「公等ハ良トニ無情ノ人ナリ公等果シテ戦ヲ欲セバ余モ亦敢テ之ヲ辞セズ余ハ必要ノ場合ニ於テハ能ク猛虎ヲ檻中ヨリ放ツコトヲ得レリ虎ハ能ク余ニ馴レ余ハ能ク之ヲ用ヰルノ術ヲ得レリ吾等試ミニ虎ノ公等ヲ犯サヾルコト果シテ余ヲ犯サヾルカ如クナルヤ否ヤヲ見ン」ト惟フニ此等ノ言辞ハ敢テ其意ノ至情ヲ発シタル者ニシテ決シテ一時ノ偽言ニアラズ蓋シルイフイリップハ曽テ四国同盟ノ訂結ヲ以テ其身ニ無上ノ辱ヲ与ヘタルモノト思料シタルナリ然レドモ彼レハ又之レカ為メニ其剣立セハ王政ノ安危ヲ賭シテ同盟国ト戦ヲ挑リノ意アリシニアラズ彼レハ其自ラ言ヘルカ如ク其国人ノ望ヲ失ハナルガ為メ又之ニ由リテ日耳曼ノ二大国ヲ恫喝スルカ為メチエールヨリモ一層高声ニ叫フヲ其政策ノ宜シキヲ得タルモノナリト思料シ而シテ彼レモ亦チエールト均シクメヘメツタリノ抵抗久シキニ弥リテ四国同盟ノ自ラ潰倖スルニ至ルヘキヲ信セリ然レトモ彼レハ徹頭徹尾欧洲ノ平和ヲ破フルヲ欲セス故ニ墺都駐剳ノ仏国大使サントオーレールニ密書ヲ送リテ言ヘリ「余ハ特ニ卿ニ告ク卿ハ須ク余ノ長クチエールニ誘惑セラレザルヲ知ラサルベカラズ彼レハ戦ヲ望ムモ余ハ敢テ之ヲ望マズ若シ他ニ策ノ施コスヘキ者ナキトキハ余ハ遂ニ彼レヲ免黜スルモ決テ列国ト絶ツコトナカルベキナリ」

然レドモ ルイー、フイリツプハ陽ハニチエールニ和シテ專ラ主戰説ヲ唱道セリ蓋シ當時仏國ノ人心ハ殆ムド其激昂ノ頂点ニ達シ王若シ公然其ノ平和的意思ヲ發表スルトキハ即時ニ顚覆ノ禍ニ遭フコト必然疑ヲ容レズ是時ニ當リテルセイエーズノ國歌ハ到ル所ノ劇場ニ謡ハレ新聞紙ハ其最モ温和ナル者ト雖ドモ誓フテ國民ノ為メニ其耻辱ヲ雪カザルヘカラスト絶叫シ全國ヲ擧テ千八百十五年ノ條約ト新神聖全盟トニ對シテ至大ノ反動ヲ生シ往年拿破烈翁一世ノ為メニ被ムリタル困厄ト不幸トハ全ク之ヲ忘却シテ唯ダ其光榮ノミヲ回想シ當時倫敦ニ逃レタル路易勃奈巴爾篤ハ此ノ

形勢ヲ視テ再ヒ起テ帝政恢復ヲ計ルノ好時機ニ際會セリト為シ海ヲ隔テヽ遥カニ数乱ノ陰謀ヲ指導セリ而シテ英國政府ハ疾クニ其陰謀ヲ覺知セサリシニアラサリシモ是レ適々仏國政府ニ恐慌ヲ與フル所以ナルヲ以テ其為ス所ヲ傍觀シテ絶エテ之ヲ制止スルコトアラザリキ是ニ於テ路易勃奈巴爾篤ハ八月六日若干ノ同志ヲ從ヘテブーローニユニ来リ其嘗テ千八百三十六年ヲ以テストラスブルクニ於テ試ミタル暴擧ヲ再演セントモ其事復タ敗レテ逮捕ヲ受ケ獄ニ投セラレタリ顧フニ拿破烈翁ノ此ノ擧タル良トニ軽躁ノ擧タルヲ免レズト雖トモ之ニ由リテ著シク ルイー、フイリツプノ憂慮ヲ加ヘタルハ

疑ヲ容レス故ニ王ハ一方ニハ今尚ホ国民ノ意ヲ
迎ヘテ陽ハニ主戦論ヲ唱道スルト同時ニ他方ニ
ハ陰カニ四国合盟ニ懇請シ仏国ヲシテ其孤
立ノ境ヲ出デシメムコトヲ計レリ
ルイー、フイリツプハ其女婿タル白耳義王レオポー
ル一世カヴイクトリア女王ノ宮廷ニ大ニ勢力ヲ
有スルヲ視テ之ヲ以シテ仏国モ亦東方問題
ニ関スル諸大国ノ協商ニ加ラムコトヲ請求セリ
而シテレオポール一世ハ若シ仏国ニ於テ革命党
其権力ヲ専ラニシ列国ト戦ヲ開クニ至ルト
キハ自国先ツ其併呑スル所トナラムコト
ヲ恐レルイー、フイリツプノ為メニ百方辯疏ス
ル所アリ英女王及ヒ諸大臣ハ容易ク其ノ乞

ヲ容レムト欲スルノ色アリシモパルメルストン
ハ固ク執リテ其言ヲ用ヰス而シテ其内閣ト
北欧三国トニ對シテ彼レカ威権ヲ有スルノ
大ナル遂ニ断然レオポールノ請求ヲ拒斥セシ
メ次ヒテ八月三十日ノ覚書ヲ以テ仏国政府ニ
告ケルニ其欧洲ノ協商ニ加ハルコトハ敢テ之ヲ
妨ケスト雖トモ七月十五日ノ条約ハ悉ク之
ヲ実行シテ一字モ訂正ヲ許サヾル旨ヲ以テ
シタリ是レ実ニ仏国政府ヲ嘲哢シテ侮辱
ニ加フルニ侮辱ヲ以テスル者ナリ
チエールノ内閣ハ此ノ覚書ニ接シテ更ニ大ニ主戦
説ニ傾クニ至レリ是ヨリ先キ首相ハ既ニ七月
二十九日ヲ以テ王ニ請フテ豫備兵ヲ招集ス

ルノ勅令ヲ發セシメ若干ノ新聯隊ヲ創設シ盛ムニ兵器ヲ製造シ艦隊ヲ補充シ各地ノ城寨ニ防禦ノ備ヲ嚴ニセシカ九月十三日ニ至リ議院ノ閉會中ニ係ラス自己ノ責任ヲ以テ新タニ一億「フラン」ノ經費ヲ支出シテ巴里ノ堡壘ヲ修築スルノ用ニ充テ之ト仝時ニ四国仝盟ニ送ルベキ最後ノ促答狀ヲ草定シ之ヲ以テ其開戰ノ告示ニ代ヘムコトヲ計レリ是レヨリ先キ埃及ニ派遣セラレタル仏国ノ使節ワリウスキー伯ハ八月二十五日メヘメツワタリーニ會見シテ其要求ヲ埃及ヲ世襲領トナシシリーヲ終身領トナスニ限ルコトヲ諾セシメ次ヒテ同シヤ日ノ提議ヲ土廷ニ傳フルカ為メ同月三十日

ヲ以テ轉シテ君士坦丁堡ニ赴ケリチエールハ仏国及其被護者タルメヘメツワタリーノ許諾シタル讓歩ノ極メテ重大ナルヲ揚言シ是レヨリ以上ハ一歩モ退クコト能ハストナシ九月十八日英国ノ代理公使ビユルウエルニ告ケテ云ヘリ『若シ貴国政府ニ於テ土帝及ヒ自餘ノ諸国ヲ勸誘シテ此ノ條件ヲ採納セシムルニ其力ヲ尽クスコトアラハ英仏二國ハ再ヒ相協和シテ無二ノ友邦タラム然ラスムハ吾等ハ既ニメヘメツワタリーヲ說キテ其讓歩ヲ諾セシメタルヲ以テ亦宜シク之ヲ扶クルニ其力ヲ竭クサヾルベカラズ』ト更ニ靜カニ公使ヲ諦視シテ云ク『貴下ハ余ノ言ヘル所ノ事態甚ダ重要ナル所以ヲ解シタルナルベシ』ト

チエールノ此ノ宣言ハ大ニ英國ノ内閣員ヲ憂懼セシメタリ彼等ハ其同僚パルメルストンカ自國ノ累世ノ讐タル露國ニ結托シテ專ラ仏國ヲ排斥スルヲ以テ其策ヲ誤マレリトナシ甚シク自國ノ面目ヲ損スルコトナクシテ再ヒ仏國ト相親ムニ至ラムコトヲ望メリ故ニ九月下旬ニ至リ仏國ヨリ提出シタル条件ニ關シテ内閣ニ於テ一大争論ヲ生シタモパルメルストンハ固ク其前説ヲ主張シテメヘメツトアリーハ必ス同盟ノ兵力ニ抵抗スル能ハス之ト稱シルイー、フイリツプハ何カナ場合ニ於テモ決シテ戰ヲ開クコトヲ敢テセストト揚言セシガ其ノ後ノ事變ハ果シテ其言ノ誤ラザルヲ証明シタリ

パルメルストンガ其同僚ニ迫マラレテ賺カ仏國ニ對スル態度ト言語トヲ改メタリトスルニ方リテ東方ヨリ達シタル二國ノ報知ハ之ヲシテ殆ムド手ノ舞ヒ足ノ踏ム所ヲ知ラサラシメ之レカ為メ頓ニ其讓歩ノ念ヲ斷ツニ至レリ是ヨリ先キ土廷ハ使節ヲメヘメツトアリーニ送リテ其ノ服從ヲ促カスノ命令ヲ傳ヘ而シテ「パシヤ」ガ之ニ對スル回答ノ未タ君士坦丁堡ニ達セサルニ及ヒテ英墺ノ聯合艦隊ハシリーノ海岸ヲ封鎖シ九月十一日其海岸ノ一要塞ベールートハ提督ナピエールノ為メニ砲撃セラレイブラヒンノ兵ハ之ヲ捨テ、退卻セリ其ノ後チ三月ヲ過キテ土廷ハ仏國ノ使節ワレウスキーノ提議ヲ斥ケ英國大使ポンソンビー

ニ言ヲ容レテ「パシヤ山」ノ官職ヲ褫奪シタリ是時ニ方リ「パルメルストン」ノ政策ハ到ル處ニ勝ヲ制シテ彼レハ殆ムド得意ノ頂上ニ達シタリ彼ハ啻ダニ東方ニ於テ其志ヲ逞フスルノミナラス更ニ西班牙ヲシテ遂ニ全ク英国ノ勢力ニ屈従セシメタリ是ヨリ先キ「マリー、クリスチヤンス」ハ「エスパルテロー」ノ権力ヲ殺クニ久シク其ノ心ヲ労シタリシカ此ノ時ニ至リテ竟ニ自ラ摂政ノ職ヲ罷メテ仏国ニ退去シ而シテ多年英国ニ結托セル「エスパルテロー」ハ年少ノ女王「イザベール」ノ命ニ由リテ大小ノ國事ヲ総理スルニ至レリ是ニ至リテ「パルメルストン」ノ英国ニ於ケル人望ハ恰モ旭日ノ沖天スルカ如ク能ク其国ノ光榮ヲ発揚シ其民ノ自尊心ヲ満足セシメタル者トシテ人皆之ヲ崇拝スルコト殆ムド神ノ如クナリキ

「ベールート」砲撃ノ報ト「パシヤ」ノ官位褫奪ノ報トノ佛国ニ達スルヤ国民ノ憤怒ハ一時ニ其頂上ニ達シタリ政府ト人民トニ論ナク此ノ如ク駿速ニ此ノ如ク暴激ニ倫敦條約ノ実行セラルベシトハ曾テ其念到セサリシ所ナルヲ以テ一タビ此ノ報ニ接スルヤ国中到ル處ニ必ス之レガ復讐ヲ圖ラザルベカラズト絶叫シ到ル處ニ必ス戦ヲ開カザルベカラスト呼號シ而シテ首相「チエール」ハ即時ニ兵ヲ起スノ意ナキモ来春ヲ待チテ戦ヲ開カムコトヲ計レリ然レドモ彼レハ當時至大ノ謬見ニ陥リテ悟ルコト能ハサリ

キ例セハベールートノ砲撃ニ遭テイブラヒンノ
兵ハ殆ムト戰ヲ交フルニ及バズシテ潰走セシニ
係ラズ彼レハ猶ホメヘメツタリーガ永ク合盟軍
ニ抵抗シテ其戰備ヲ全クスルヲ得セシムベシ
ト思料シ又自己ノ欲スルガ儘ニ交戰ノ局面ヲ
限ルコトヲ得ベシト思料シ而シテ彼レハ其攻撃
ヲ意太利ニ限リ其人民ヲ使嗾シテ墺國ニ叛カ
シメムコトヲ計レリ彼レハ又普國ハ傍觀シテ動
クコトナカルベシト思料セリ然レドモ是レ合國ノ
事情ニ通セザルノ甚タシキ者ニシテ當時普
國ト全日耳曼ノ人民トハ齊シク仏國ヲ目シテ
累世ノ讐敵ナリトナシ千八百十三年ニ於ケルト
均シク佛國ト一快戰ヲ試ミムト欲シ維納ヨリ

伯林ニ漢堡ヨリムーニツヒニ至ルマデ到ル処ニベツ
ケルノ『莱因ハ日耳曼領ナリ』ト云フ歌ヲ高唱シ
往キニ千八百十五年ニ於テ求メテ得ルコト能ハ
ザリシアルサース、ローレンスノ二州ヲ獲ムコトヲ切
望シ一時其跡ヲ歛メタルガ如キ觀アリ日耳
曼統一ノ思想ハ今ヤ前日ニ倍スル勢ヲ以テ再
ビ勃興シ其勢ヒ浩々トシテ恰モ江河ノ決スル
ガ如ク以テ千八百七十年ニ至レリ而シテ是レ
未ダチヱールノ知ルニ及バザル所ニシテ又當時ノ
仏國人民ガ槩ネ知ル能ハザリシ所ナリトス
然ラハ當時彼等ガ大呼シテ請求セシカ如ク
遂ニ戰ヲ開キタリトセバ果シテ何カナル結果
ヲ生シタルベキ乎是レ余輩ノ知ル能ハザル

所ニシテ凡ソ此ノ如キ疑問ニ確答ヲ與フルハ畢竟無用ノ言ニシテ又且ツ妄斷ニ渉ルヲ免レズ但ダ當時ノ形勢ガ何カニ危急ニ迫レルノ觀アリシトスルモ到底開戰ニ至ルコト能ハザル一大理由ノ存スルアリ他ナシルイー、フイリツプガ何カル代價ヲ拂フテモ必ス平和ヲ維持セント欲シタルコト是レナリ蓋シルイー、フイリツプハチエールヨリモ一層沈着ニシテ一層識見ニ富ミベールリトノ砲撃以来既ニ能クメヘメツタリーノ抵抗ノ久シキヲ持スルニ足ラサルヲ知レリ故ニ十月初旬ニ至リ王ハチエールノ奏請ヲ斥ケテ開戰ノ意義ヲ含有セル宣言ヲ發スルコトヲ拒絶セリ是ニ於テチエールハ即時ニ辭表ヲ呈シタルモ王ハ當時人心ノ激昂セル彼レ若シ内閣ヲ去ルトキハ王室ノ為メニ不測ノ禍ヲ釀スヘキヲ説キテ懇ロニ其留任ヲ求メタルヲ以テチエール亦遂ニ之ヲ諾シ而シテ若シ仏国艦隊ニシテ英国艦隊ト相接近スルトキハ或ハナヴランノ役ニ於ケルカ如ク不時ノ衝突ヲ生スルニ至ラムコトヲ恐レ其東方ニ派遣セル艦隊ヲ召喚セリ次ヒテチエールハ一通ノ公文ヲ作リテ十月八日之ヲ列國ニ送付セリ要ハ若シ四国合盟ニシテメヘメツタリーヨリ埃及ノ封領ヲ褫奪スルトキハ仏国ハ断シテ戰ヲ開クベシト言フニ在リ是レ到底開戰ノ場合ナシト言フニ均シキ者ナリ何トナレハ墺国モ亦ルイー、フイリツプ

外務省

ト均シク戰ヲ欲セサル者ニシテメヘメツタリーノ官位褫奪ハ單ニ懲戒的處分ニ止マリテ之ヲ実行スヘキ者ニアラスト宣言シ而シテパルメルストンモ亦其同僚ノ迫ル所トナリテメテルニツヒト仝一ノ保障ヲ與ヘタレハナリ

仏国政府ニ於テ既ニ右ノ公文ヲ發シタル後チト雖ドモ欧洲ノ平和ハ未ダ全ク確保セラル、ニ至ラス チエールハ時機ヲ待チテ更ニ事ヲ擧クルノ志アリ彼レハ衆論ノ後援ヲ有スルヲ以テ遂ニルイ、フイリツプニ迫リテ其主戰說ニ服從セシムルヲ得ヘシト思料シ仏国ハ必ス メヘメツタリーヲシテ七月十五日ノ条約ニ定メタル条件ヨリモ一層良好ナル條件ヲ得セシメサルヘカラズト揚言シ

益々力ヲ戰備ニ竭クシ列国ニ對シテハ依然トシテ挑戰的態度ヲ采レリ然ルニルイ、フイリツプハ墺相メテルニツヒヨリ屢々チエールヲ黜ケテ其平和的意向ヲ証明スヘキヲ勧告セラレ只向ラ時機ヲ待チテ其首相ノ職ヲ罷メムコトヲ欲シタルニ偶々十月十五日王ハ刺客ノ侵カス所トナリ幸ラシテ其難ヲ免レタルヨリ頓ニ國民ノ信望ヲ回復シチエールノ職ヲ解クモ亦一モ恐ル、所ナキニ至レリ是ニ於テ王ハ意ヲ決シテ之ヲ罷免セムト欲シ其後数日ヲ経テチエールハ王ガ議會ノ開院式ニ於テ為スベキ演說ノ草案ヲ作リテ之ヲ王ニ示スヤ其文章語調爾シク激越ニ過キタリトナシ更ニ平

談無味ノ言辞ヲ以テ之ニ代フルヘキヲ命シ
タルモチエール肯テ其命ニ従ハズ而シテ王亦
甚ク執リテ譲ラザルニ及ビテチエールハ其閣
僚ト倶ニ辞表ヲ呈出シタルニ王ハ即時ニ之
ヲ聴許シ越テ九月新内閣ノ組織成リテ大将
スールト之レガ首相ニ任シタルモ其実権ハ外務
大臣ニ任シタルギゾーノ掌握スル所トナレリ

其六　十月二十九日ノ内閣ギゾー初政ノ
困難

新内閣ハルイ、フイリップノ意ニ投セルカ如ク又
メテルニッヒガ多年仏国ノ為メニ希望セルカ如ク
保守ヲ旨トシ平和ヲ主トスルノ内閣ニシテ其成
立ノ始メヨリ極メテ不人望ニシテ又極メテ困難

ノ衝ニ当レルヲ以テ人皆其久シキヲ保ツ能ハス
ト思料セリ彼レハ先ツ仏国ヲシテ欧洲列国ト
協和セシメザルベカラズ然レドモ偏執条約既ニ
訂結セラレ四国同盟既ニ成ルノ後チニ於テ苟モ
仏国ノ面目ヲ汚スコトナクシテ何カニシテ其
協和ヲ行フコトヲ得ルカ　ギゾーハルイ、フイリッ
プト同シク其意ヲ平和ヲ維持スルニ決心セリ
然レドモ彼レハ全ク四国同盟ノ意思ニ服従シ
テ平和ヲ買ハムト欲スルニアラズ勿論既ニ戦
ヲ辞サザルニ決心シタル以上ハ須ラク譲歩
スル所ナカルベカラズト雖ドモ而モ亦幾分カ
其外観ヲ粧フテ其自尊心ニ満足ヲ与フル
所ナカルベカラズ此ノ事ニ就キ新内閣ハ一時

ハ頗ル其望ミヲ繋ケル者アリ彼レハ欧洲ノ立
君国ニ示スニ秩序ト安寧トヲ以テスルトキハ四国
同盟モ亦必ズ前内閣ニ向テ拒絶シタル者ヲ與
フルコトヲ諾スベシト思料セリ故ニギゾーハ公然
英国ト倶ニ諸州ヲ一新ノ危殆ヲ避ケ写換ニ
レオポール王ヲシテ同盟国ハメヘメツタリーノ為メ
ニ少シク七月十五日ノ条約ヲ訂正シ以テ仏国
ノ民心ヲ安撫シ之ヲシテ欧洲列国ノ協会ニ加
ハルコトヲ得セシムルノ素ナキヤ否ヤヲ問ハシ
メタルニ英国内閣員ノ多数ハ喜ビテ仏国ノ
需メニ應セムト欲スルノ素アリシモ当時外
交ノ事ニ実ニシテ無上ノ権力ヲ有シタルパルメル
ストンハ毅然トシテ一切ノ譲歩ヲ為スコトヲ

外務省

拒ミ且巴里駐劄ノ英国大使グランヴイール卿
ニ送レル書中ニ於テ公言シテ云ク「吾人ハチヱール
ヲ挫ルヽガ為メニ欧洲ノ利益ヲ害スルコト
能ハザルト均シク又ルイー、フイリツプ及ビギゾー
ノ意ヲ迎フルガ為メニ欧洲ノ利益ヲ害スル
コト能ハズ吾人若シ今ニ於テ退譲ナストキハ
仏国民ハ之ヲ以テルイー、フイリツプノ衰頽ニ帰
シテ然ル者ナリトナサスシテ彼等ノ脅迫ニ
屈シタル者ナリトナサム是ツ吾人ガシリーニ
於ケル運動ハ今ヤ将ニ其事功ヲ奏ケムト
ス若シ猶ホ少シク耐持スルトキハ各所ノ方
面ニ於テ全勝ヲ占ムルコト難キニアラズ此
ノ時ニ方リテ遽カニ吾人ノ運動ヲ中廃スル

外務省

ハ是レ愚ノ甚シキ者ナリ凡ソ仏国人ノ如キ者ノ尊敬ヲ変クベキ最上ノ手段ハ之ニ向フテ一歩モ退譲スルコトナク兵力ヲ排スルニ兵力ヲ以テスルニ在リ」トパルナルストンハ仏国政府ガ其関與セザル條約ノ実行ニ就キテ喙ヲ容ルヽノ権利アルヲ認メズ其ノ不平ト其脅迫トハ毫モ意ニ介セズト揚言シ更ニグランヴール卿ニ告ケテ云リ「ギゾー氏ノ所謂仏国ガ東方ノ鎮定ニ関繫セザルガ為メ危険ノ結果ヲ生スルコトアルヘシトハ吾レ其何ノ意タルヲ解スルコト能ハズ」ト

英国ニ於テハ人皆パルナルストンノ剛愎ヲ非難シ彼ノ同僚ハ齊シク彼レニ迫リテ幾分カ仏国政府ニ譲歩スル所アラシメムト欲シタルモ此ノ時宛モ東方ヨリ達シタル報知ハ彼レガ倨傲ナル態度ヲ取レルノ其由ナキニアラサルヲ証明シ彼レノ説ハ為メニ多ク勝ヲ退譲派ニ制シタリ是ノ時ニ方リテシリーノ全部ハ悉クメヘメツタリノ統轄ヲ免レ海岸ノ諸市ハ相率ヒテ英墺聯合艦隊ノ手ニ落チ同地方ノ咽喉タルサン、ジヤンダークルハ十一月二日亦聯合艦隊ノ陥ル、所トナリ内地ノ人民ハ英国ノ間諜ニ煽動セラレテ到ル所ニ叛乱ヲ起コシメヘメツタリハ復タ之ヲ制スルコト能ハス勢ヒ此ノ如クナルヲ以テパルナルストンハ一歩モメヘメツタリニ假借スルコトナク之ヲ其最後ノ城塁タル埃及ニ駆逐シテ再ビ出ツ

外務省
外務省

ルコト能ハザラシメムコトヲ計レリ
パルメルストンノ為ス所此ノ如クナルヲ視テ仏国政府ハ其平和ヲ希望スルノ念何カニ切ナリトスルモ遂ニ之ヲ不問ニ附スルコト能ハズギゾーハ其十一月十六日ノ公文ヲ以テ四国合盟ノ為メニ欧洲ノ共同体ヨリ除カレタル仏国ハ一モ其ノ面目ヲ損シ権利ヲ捨ツルコトナクシテ再ビ其ノ共合体ニ加ハルノ時機ヲ待チ而シテ其時捧ニ達スルマテノ間ハ都ヘテ行動ノ自由ヲ有スベシト宣言シ其後チ数月ヲ経テギゾーハ代議院ニ於テチエール及ビ其党与ノ為メニ其只管ラ平和ヲ望ムノ非ナルヲ攻撃セラレテ誓フテ十月八日ノ公文ヲ維持シテ変セサルヘキヲ断言シ仏国ハ決シテメヘメツタリーガ埃及ヲ奪ハルヽヲ黙視スルコト能ハストノ称シ乃チ其言ノ虚ナラザルヲ証スルカ為メスールト内閣ハ鋭意シテ前内閣ノ経始シタル戦備ヲ修メ人ヲシテ戦端破裂ノ時機ノ日ニ益ニ切迫スルヲ感セシメタリ

民心ノ激昂ハ独リ仏国ニ於テノミナラズ日耳曼ニ於テモ今尚ホ頗ル猛烈ヲ極メリ十一月八日メテルニツヒハ巴里駐劄ノ墺国大使アポニイニ送リテ云ク「チエールハ自ラ拿破烈翁ニ比セムコトヲ望メリ而シテ今之ヲ日耳曼ノ形勢ニ徴スルニ両者相似タルコト極メテ甚シク或ハチエールヲ以テ一層拿破烈翁ニ勝レリト言フモ不可ナ

ルコトナシ今若シ拿破烈翁ガ十年間ノ壓抑ニ由リテ招致シタル事態ヲ該國ニ生セント欲セバチユイールノ為メニ僅々数月ノ労ニ過キズ然リ日耳曼ハ国ヲ挙テ戦ノ準備ヲ為セリ国ヲ挙テ革命的暴徒ノ侵入ニ反抗スルノ備ヲ為セリ」ト其後チ数月ヲ経テ彼レハ更ニ書ヲアポニイニ送リテ日耳曼ニ於テ人民ノ激昂セルハ恰モ千八百十三年及ビ千八百十四年ニ異ナラザルヲ告ケ且ツアポニイヲシテ明々地ニ仏国政府ニ告ケシムルニ事態ノ甚ダ切迫セル所以ヲ以テシ「若シ仏国ニシテ速ニ其態度ヲ一変シテ平和ヲ維持スルノ保障ヲ与ヘザルトキハ墺普二國ハ日耳曼聯邦ガ其安全ヲ保ツガ為メ

ニ施サムト欲スル措置ヲ止ムルコト能ハズ」ト云ヒ而シテ当時伯林政府モ亦之ニ均シキ云辞ヲ為シテ仏国政府ヲ威嚇セリ蓋シ墺普二国ハルイーブイリツプガ其国民ノ輿論ニ抵抗スルノ力ナク其逐ル所トナリテ遂ニ戦ヲ開クニ至ラムコトヲ憂ヒ就中十二月十五日ハ拿破烈翁ノ遺骸巴里ニ著シテ其埋葬ノ式ヲ挙行スルノ日ナルヲ以テ群民ハ此ノ日ヲ以テ騒乱ヲ起シ卒ニ延キテ欧洲ノ平和ヲ擾タスニ至ラムコトヲ恐レタルナリ故ニ二国ハ維納ニ於テ会議ヲ開キ仏国ト戦ヲ開クノ場合ニ施コスヘキ軍事上ノ措置ニ就キテ協議ヲ遂ケ且ツ故ラニ其意ヲ仏国政府ニ通報シテ其戒心ヲ

促カセリギゾーハ二国ノ政略ヲ係クガ為メ
百方弁疏スル所アリシモ而モ竟ニ其戦備
ヲ解キテ平和ノ保障ヲ与フルコト能ハス彼レ
ハ言ヘリ「英国ノ仏国ニ対スル動作悪シク不遜ニ
渉レルヲ以テ今俄カニ戦備ヲ解クハ仏国ノ為
メ極メテ危険ニシテ又大ニ国家ノ体面ヲ傷フ
者トス故ニ今ノ時ニ方リ宜シク譲歩ヲ為スベ
キ者ハ仏国ニアラスシテ英国ナリ」ト
此ノ時ニ方リパルマルストンハ其幸運ニ狎レ益々
倨傲ノ気ヲ長シテ傍若無人ノ行ヲ事ト
セリ是ヨリ先キ土都駐剳ノ英国大使ポンソン
ビーガ土廷ニ説キテ仏国ノ提議ヲ将ニ其行
ハレムトスルニ排斥シタルコトハ既ニ前段ニ於テ
之ヲ言ヘリ既ニシテサン、ジヤン、ダークル陥落ノ
後チ提督ナピエーハ英仏ノ間ニ衝突ヲ起スノ
恐レアルヲ顧ミス其艦隊ヲ率ヒテアレキサン
ドリー港ニ到リヲヘメツタリー若シ降書ヲ送
ラザルトキハ即時ニ之ヲ砲撃スベシト揚言セ
リ「パシヤ」ハ其ノ遂ニ抗スヘカラサルヲ慮カリ
テ降伏ヲ求メ十一月廿五日立口ニ媾和条約ヲ訂
結シテ埃及ノ兵ハ悉クシリーヨリ退去シ「パシヤ」
ハ総ベテ土耳格ノ軍艦ヲ還与スルトキハ四国
同盟ハ再ヒ「パシヤ」ヲ攻撃スルコトナク土廷ヲシ
テ之ニ埃及ノ世襲管領権ヲ与ヘシムベシト
規定シタリ然ルニ此ノ条約訂結ノ報ノ君
士坦丁堡ニ達スルヤポンソンヴイーハ又之ヲ廃

棄スル百方力ヲ盡クシ遂ニ土廷ノ大臣ヲシ
テ土帝ハアレキサドリーノ媾和条約ヲ認メ
ス叛臣メヘメツタリーニハ唯ダ埃及ノ総督
領権ノ外之ヲ與ヘサル旨ヲ宣言セシメタリ

其七　危變ノ收局、海峡条約

以上ノ事ハ千八百四十一年一月初旬ニ其報告倫敦
及ビ巴里ニ達シタリ而シテパルメルストンハ言フ
マデモナク土廷ノ宣言ヲ可トシタルヲ以テ東
方ノ禍乱ハ猶ホ未ダ平定ニ至ラズ而シテ倫敦
條約ニ由リテ其端ヲ啟キタル欧洲ノ危機
ハ益々其切迫ヲ加ヘ仏国政府ハ何カニ其平
和ヲ欲スルノ念熾ムナリトスルモ今若シ遽
カニ戰備ヲ撤スルトキハ必ス大ニ其国ノ体
面ヲ辱メ或ハ遂ニ亡滅ヲ招クニ至ルノ恐レナキ
ニアラザルヲ以テ益々其戰備ヲ修メ巴里ノ
堡塁修築ニ関スル法案ヲ草定シテ之ヲ代
議院ノ議事ニ附シタルニ代議院ニ於テハ一月
廿一日ヨリ二月一日ニ亘リテ反覆討論ノ後チ
終ニ大多数ヲ以テ之ヲ可決シタリ然ルニ墺普
ノ二國ハ大ニ虚勢ヲ張リテ仏国ヲ脅迫セル
ニ拘ハラズ仏国ノ此ノ決然タル態度ヲ取
レルヲ視テ心窃カニ憂慮ノ念ヲ生シ就中
墺国ニ至リテハ何カナル事アリトモ断シテ戰
ヲ開クヲ欲セスルイ、フイリツプ及ビギゾーハ
夙トニ其然ルヲ察セリ故ニ其盛ムニ兵備
ヲ修メテ戰ヲ欲スルノ状ヲ粧ヘルハ是レ其ノ

実維納政府ヲシテ英国ヲ牽制セシメ由リテ以テ戦ヲ避ケムト欲シタルニ外ナラス而シテメテルニツヒノ意ハ只管ラ欧洲ニ於ケル旧来ノ状勢ヲ維持シテ変ゼサルニアルヲ以テ今ヤ仏国ノ新内閣ガ務メテ平和保守ノ政策ヲ事トスルヲ視テ之ヲ誘フテ墺国ノ政策ニ協同セシムルハ敢テ難キニアラストナシ欧洲ノ戦乱ヲ未然ニ豫防シテ仏国政府ノ歓心ヲ収ムルハ最モ其ノ策ノ得タル者ナリト思料シ窃カニ之ト協商ヲ遂グルノ意アリ
夫レ此ノ如ク墺国既ニ戦ヲ欲セザルヲ以テ普国独リ進ミテ危キヲ冒カスコト能ハズ蓋シ普国ノ利益ハ終始墺国ト力ヲ勠セテ莱因方面ニ於テ戦ノ起ルヲ避クルニ在リ故ニ千八百四十一年一月ニ至リ墺普二国ハ誠実ニ東方ノ平和ヲ復スルニ尽力シ速カニ埃及問題ノ局ヲ結ビ仏国ヲシテ其危懼ノ念ヲ去リ其戦闘ノ備ヲ撤シ以テ欧洲列国ノ協同ニ加ハラシメムコトヲ望メリ
右ノ如クナルヲ以テ四国同盟ハ露国ノ反対ト「パルメルストン」ノ故障トニ拘ラス墺普二国ノ斡旋ニ由リテ遂ニ埃及問題ヲ決定シ仏国政府ヲシテ之ヲ兼認セシムルコトヲ得タリ即チ四国ハ一月三十一日ヲ以テ一通ノ公文ヲ土廷ニ送リ其「メヘメツトアリー」ノ官職ヲ褫奪セル詔勅ヲ取消シ其直系ノ子孫ニ永ク埃及ノ管領権ヲ與フベキ

ヲ勧告セリ
右ハ佛國政府ノ為メニ極メテ細小ナル成功ニ過キズト雖トモ而モ亦一個ノ成功タルヲ失ハス彼レハ今ヤ敢テ其体面ヲ辱ムルコトナク四大国ノ招キニ應シテ之ヲ倶ニ親交ヲ結フコトヲ得ヘク勿論七月十五日ノ條約ニ由リテ四国ノ為メニ彼レカ如ク至大ノ凌辱ヲ受ケタルノチニ於テ日ヲ経ルコト未ダ久シカラスシテ再ヒ之ト親交スルハ未タ称シテ光栄アル政策ト謂フベキニアラズ且ツ国中ノ衆論ハ今當大ニ倫敦ノ『神聖同盟』ヲ憤ホリ政府ガ欧洲列国ニ對スル事ゴトニ冷淡ヲ旨トシテ敢テ深ク之ト相親ムコトナク以テ其凌辱ニ酬ヒムコトヲ主張セリ然レドモ

「ギゾー」ハ夙トニ其諜者ノ報告ニ由リテ列国ノ状勢ヲ察シ仏国若シ固ク四國ト相和スルコトヲ拒ミテ孤立ノ態度ヲ取ルトキハ七月十五日ノ一時的同盟ハ變シテ永久的ノ合盟ト成リ遂ニ「シヨーモン」条約ノ再訂ヲ視ルニ至ラムコトヲ恐レ反覆熟考ノ後チ卒ニ倫敦駐剳ノ仏國代理公使「ブールクニー」ノ申請ニ應シ之ヲシテ『五國条約』ヲ訂結スルノ談判ヲ開カシメ而シテ其談判ニ於テハ厳ニ下記ノ條件ヲ循守スベキヲ命シタリ(一)條約ノ草案ハ仏国ヨリ提出セスシテ他国ヲシテ之ヲ提出セシムルコト(二)「メヘメツタリー」ヲシテ必ス埃及ノ世襲管領權ヲ保有セシムルコト(三)七月十五日ノ条約ハ既ニ其実施ヲ了レル者ト

視倣シ并ビ之ニ論及セサルコト、(四)四大国ヨリ一通ノ
公文ヲ仏国政府ニ送リテ全条約ノ既ニ満期ニ
至レルコトヲ通知スルコト、(五)兵備擬問ノ問題ハ
一切提起スベカラザルコト、此ノ五条件ヲ以テ行ハ
ル、ヲ得ハ佛国政府ハ直チニ四大国ト倶ニ東方ニ
関スル条約ヲ訂結スヘシ但ダ此ノ条約タル極
メテ重要ナル者ニシテ其中ニ海峡閉鎖ノ土帝
ノ権利タルヲ規定シ土耳格帝国ノ独立及ビ其
領土ノ完全ヲ規定シ「シリー」ノ基督教徒保
護ニ関スル事項ヲ規定シ蘇士及ビ「ウーフラーロ」
ヲ経由セル亜細亜ノ通路ノ自由及ヒ中立ヲ規
定セサルベカラス
右ニ記シタル条件ニ本キテ千八百四十一年一

月倫敦ニ於テ仏国全権委員ト四大国トノ間ニ
談判ヲ開始シタルニ其談判ノ進捗頗ル緩慢
ニシテ数週間ヲ出スシテ稍ク其落着ヲ告ケ
仏国政府ノ提出セル条件ハ概シテ四国ノ容納
スル所トナリ三月初旬ニ至リテ四国ハ一ノ議定
書ヲ作リテ七月十五日ノ条約ハ既ニ其実行ヲ終
レル者タルコトヲ宣言シ五国条約ノ草案
モ亦既ニ定リテ仏国政府ノ調印ヲ乞ヘリ但ダ
此ノ草案ニ載スル所ハ未ダ全ク「ギゾー」ノ希望
スル如クナル能ハズシテ露国ハ徹頭徹尾土
耳格帝国ノ独立ト其領土ノ完全トヲ保障スル
ヲ拒ミ英国ハ敢テ亜細亜ノ通路ニ関スル事項
ト「シリー」ノ基督教徒ニ関スル事項トヲ規

定スルヲ欲セズ要スルニ英米ニ規定スル所ハ
唯ダ「ダルダネール」及ヒ君士坦丁堡ノ海峡ハ絶
対的ニ土耳其ノ管領ニ属シ他国ノ軍艦ハ総
テ其ノ内ニ出入スルヲ許サズト云フニ過キザリキ

ギゾーハ新条約ノ草案ノ未ダ全ク其希望ニ
副フコト能ハザルニ係ラズ速カニ事局ヲ終了
セント欲シテ将ニ之ニ調印ヲ施コサムトスルニ
際シ三月九日君士坦丁堡ヨリ達シタル急報ハ
人ヲシテ再ビ東方ノ擾乱ヲ惹起シタルノ思
アラシメタリ是ヨリ先キ土帝ハ二月十三日ノ勅
令ヲ以テメヘメツタリーニ埃及ノ世襲管領権
ヲ与ヘリト雖ドモ英国大使ノ勧告ニ従ヒ其
譲与ニ種々ノ条件ヲ附随セシメテ殆ムト之
ヲ有名無実ノモノトナセリ即チ其条件ノ主要
ナル者ヲ挙クレハ将来埃及ノ領主ハ欠位ヲ生ス
ルゴトニ土帝自ラメヘメツタリーノ継嗣中ヨリ其
後任ヲ命スヘシトナシ埃及ニ於ケル租税ノ徴収
法ハ土廷之ヲ定メ而シテ其収入ノ四分ノ
一ハ之ヲ土廷ニ貢献スベシトナシ「パシヤ」ハ其兵
員ノ数ヲ減シテ一万八千人トナシ下士官以上ハ自
ラ之ヲ任用スヘカラズトナセリ然レドモメヘメツタリー
ハ素ヨリ此条件ヲ承認スルヲ肯ムセス而シテメ
ヘメツタリーガ其承認ヲ与ヘザル間ハ仏国モ亦海
峡条約ニ調印スルヲ肯ムセザリキ

夫レ此ノ如ク英国政府ノ剛戻移ルコトヲ失
ハサルガ為メ東方ノ危棟ハ再ビ破裂ノ勢ヲ

呈シタリ是ニ於テ只管平和ヲ希望セル「メテルニッヒ」ハ遂ニ坐視スルニ忍ビズシテ起テ土廷ニ干渉ヲ加ヘ三月廿九日土廷ヲシテ英國大使「ポンソンビー」ニ擁立セラレタル「ベツシツド」「パシヤー」ノ総理大臣ヲ罷メシメ調和的意見ヲ抱持シタル「リフアリト」「パシヤー」ヲ其後任ニ挙ゲシメタリ次ヒテ四月十九日ニ至リ新タニ土帝ヨリ発シタル勅令ニ對シテ「メヘメツタリー」ハ之ニ満足ヲ喜スル旨ヲ規定シタリ即チ其勅令ニ載スル所ハ埃及領権ノ相續ハ長幼ノ順序ニ由ルベク「メヘメツタリー」ハ佐官ノ階級ニ至ルマテ其士官ヲ任用スルヲ得ヘク彼レハ一定ノ貢金ヲ年々土廷ニ納付スベク而シテ其金額ハ双方ノ合意ニ由リテ之ヲ定ムベシト言フニ在リ英佛二國ハ五月ニ至リテ此ノ協定ノ報ニ接シタレハ五大國ノ媾和ハ爰ニ至リテ復タ片時モ猶豫ヲ須ヒサルノ觀アリ然レドモ「パルメルストン」ノ執拗ナル更ニ一ノ難問ヲ提起シ「メヘメツタリー」ガ土帝ノ讓與ヲ承認セザル場合ヲ慮カリ預ジメ之ニ對シテ施コスベキ強制手段ヲ定メムコトヲ要求シ墺普二國ガ其提議ニ不満ヲ唱フルモ曾テ之ヲ意ニ介スルコトアラサリキ既ニシテ六月下旬ニ至リテ「パシヤー」ハ此月十日ヲ以テ土帝ノ新勅令ニ承認ヲ與ヘタルノ報アリ此ニ至リテ「パルメルストン」ハ復タ其異議ヲ唱フルノ辭柄ヲ有セズ歐洲列國ハ齊シク之ニ向フテ速カニ事局ヲ終了セム

コトヲ要求セリ然レドモ當時ノ事若シ悉ク「パルメルストン」ノ意ノ如クナラムニハ歐洲ノ危機ハ猶ホ其收局ヲ見ルニ至ラザリシナルヘシ蓋シ「パルメルストン」ハ仏國ガ到底開戰ノ決意ヲ有セザルヲ看破シ其隱密ノ間ニ漸ク戰備ヲ撤去スルヲ探明シ其精神ヲ専ラ「アルゼリー」ニ傾注シテ之ニ驍勇ノ兵員ヲ派遣シ一擧シテ「アブデル、カデー」ヲ討滅セムト欲スルコトヲ知レリ而シテ是レ則チ「パルメルストン」ノ最モ悦バザル所ナリトス故ニ彼レハ更ニ種々ノ口実ヲ設ケテ専ラ妨害ヲ仏國ニ與ヘムコトヲ計レリ然レドモ彼レハ其政策ノ執拗ニ過キタルカ為メ頓ニ内外ノ信用ヲ失ヒ墺普ノ二國ハ痛ク之ヲ攻撃シ露國モ亦敢テ之ヲ援ケルヲ欲セス加フルニ彼レガ其席ヲ列ニシタル内閣ハ今ヤ多數ヲ議院ニ失フテ其仆ル、將ニ近キニアラムトス故ヲ以テ彼レモ亦遂ニ其志ヲ屈シ七月十三日倫敦ニ於テ二個ノ議定書ノ調印ヲ了レリ即チ其一ハ英国露墺普ノ四国間ニ成レル者ニシテ埃及問題ノ其局ヲ結ヘルヲ宣言シ其二ハ右ノ四国ニ仏国ヲ加ヘテ成レル者ニシテ海峡ノ中立ニ関スル事項ヲ規定セリ

危機ハ幸ラシテ其局ヲ結ヘリ二年以来戰争ト平和トノ中間ニ彷徨シタル歐洲列国ハ爰ニ至リテ始メテ一般ノ大衝突ヲ避クルコトヲ得タリ顧フニ若シ此ノ大衝突ニシテ一タビ発スルコトアラハ往キニ維納ノ會議ニ於テ定メタル凡

外務省

百ノ秩序ハ挙ケテ壊敗ニ帰セシナルヘシ然レドモ此ノ如ク経営惨憺ノ結果ニ成レル政略ノ均勢ハ其基礎猶ホ未ダ鞏固ナラスシテ暗雲ハ常ニ政略ノ天ヲ掩ヒ其人心ニ不安ヲ与フルハ千八百四十年前ニ比シテ一層其甚シキヲ加ヘ当時ノ外交家ハ仮令ヒ何カナル言ヲナセリトスルモ東方問題ハ未タ以テ其局ヲ結フニ至ラス海峡ハ唯ダ紙上ノ空文ヲ以テ之ヲ閉鎖シタルニ過キズシテ土耳格ハ昔日ヨリ一層其ノ独立ヲ維持スルノ勢力ヲ失ヒ露国ハ聊カ仏国ノ勢力ヲ削弱スルニ與カリテ其力ヲ致セリト雖ドモ要スルニ其英国ニ合同セルハ是レ其ノ欺騙ニ罹リタル者ニシテ彼レハ之レガ為メニ却テ其嘗テ「アキヤル、スケレツシ」ノ条約ニ由リテ占有セル利益ヲ失ヘリ而シテ露帝尼哥拉士ハ其然ルヲ悟リテ再ヒ其利益ヲ回復セムト欲スルノ意アリ但ダ之レヲ為スニハ其ノ前日ノ合盟タル英国ト絶タサルベカラザルヲ以テ彼レハ静カニ其時機ノ到ルヲ待テリ知ルベシ「クリミヤ」戦争ハ既ニ海峡条約ニ於テ其萌芽ヲ発シタル者ナルコトヲ将タ埃及ノ方面ニ於テモ亦未タ一モ収局ニ至レル者ナク「メヘヲツタリ」ハ一旦後一ニ退却セリト雖ドモ而モ英国ノ勢力ヲ以テスルモ遂ニ全ク其領土ヲ奪フコト能ハス彼レノ領土ハ昔日ヨリモ一層其幅員ヲ減シタルモ而モ彼レノ統治権ハ昔日ヨリモ大ニ其

基礎ヲ固定セリ仏國ニ至リテハ埃及ノ方面ニ於テアルゼリーノ方面ニ於テ将タ日ナラスシテ再ヒ其勢力ヲ回復スヘキマドリツドノ方面ニ於テ猶ホ能ク英國ノ政策ニ打撃ヲ與フルノ力ナシトセズ彼レハ固ヨリ列国トノ紛争ニ於テ大ナル屈辱ヲ被ムレリ其徒ラニ虚勢ヲ張リテ漫ニ他国ヲ恐嚇セシノ故ニ由リテ大ニ欧洲列国ノ猜疑ヲ招致セリ彼レハ一旦強大國ノ共同体ヨリ放逐セラレ後チ更ニ頭ヲ低レテ辛ウシテ其中ニ入ルコトヲ得タリト雖ドモ而モ猶ホ千八百十五年ニ於ケルカ如ク列國ハ厳ニ之ヲ監視シテ自由ノ行動ヲ為スコトヲ許サズ其政府ハ此時ヨリシテ痛ク國

民ノ信用ヲ失ヒルイー、フイリツプノ王統ヲ覆ヘスベキ革命ハ既ニ已ニ避ク可ラサルノ勢ヲ為セリ彼レハ能ク其國ノ体面ヲ汚スコトナクシテ英國ト近接スルコトヲ得サリシヨリ次第ニ墺国トノ仝盟ニ心ヲ傾ケ不知不識復仇的政策ヲ事トスルニ至リシノ故ニ由リテ益々其不人望ヲ加ヘ遂ニ其滅亡ヲ救フコト能ハサルニ至レリ之ニ反シテ英国ハ埃国ノ事変中殆ント欧洲ノ盟主トナリ而シテ今ヤ復タ露国ヲ憚カルノ要ナキヲ以テ更ニ轉シテ欧洲ニ於ケル革命ノ保護者ヲ以テ自ラ任スルニ至レリ此ノ他千八百四十年ノ事変ハ日耳曼ノ為メニ大ニ国民的思想ノ発育ヲ促カシ此時以降日耳曼

帝国統一ノ事業ハ駸々トシテ益々其歩武ヲ進メタリ

外務省

外務省